



<論文> 「マクドナルド化」と「リスク社会」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上村, 隆広 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011298

「マクドナルド化」と「リスク社会」

上 村 隆 広

1. はじめに

世紀末、千年紀末と喧しい昨今であるが、こと社会学に関する限り、いわゆる社会学の確立者たちが登場し、現代のわれわれにとって不可欠なものとなっているさまざまなアイデアを産み出してくれた日々から数えれば、まだやっと100年を超えるか超えないかの〈わずかの〉時間しか経過していない。社会学にとっては今世紀末は、まだやっと2度目の—ことによると初めての—世紀末に過ぎないのである。言いかえれば、社会学は20世紀とともに歩んできたということであり、良きにつけ悪きにつけ、社会学のありようは20世紀の歴史によって強く規定されているということである。

「近代化」、「合理化」、「産業化」、「都市化」、「情報化」、「高齢化」…と枚挙にいとまのないほど「～化(...zation)」を使って社会変動の趨勢を表現し続けてきたのが今世紀の社会学であったといえる。個々の〈ゼイション〉はその始まりや速度、広がりや影響の度合いによって違いはあるものの、互いに折り重なるようにしてパーソンズ的な意味での「全体社会」に、そしてルーマン的な意味での「世界社会」に次々とうち寄せ、増殖を続けている。社会学がそうしたさまざまな〈ゼイション〉のイメージを提示することに取り組んできたのは、今世紀の歴史がそれだけ変化に満ちたものであったことをそのまま反映しているのだということもできるが、単にそれだけではなく、歴史の浅い社会学が絶えず微かな徴候＝差異に目を向け、そこから社会の変化の可能性を読み取ることにみずからの積極的な役割を見いだしてきたことも少なからず与っていると思われる。

その数々の〈ゼイション〉の列に、社会の「リスク化」という項目が付け加わったことについて、われわれはすでに別稿で検討を開始したところである（[上村、1997/99]）。ドイツの社会学の分野でリスクがテーマとして取り上げられるきっかけを作ったのは、周知の通りドイツのウルリヒ・ベックによって、1986年の著作『リスク社会』を通じてであった。冷戦末期の東西緊張とチェルノブイリ原発事故がヨーロッパを騒然とさせていた時期に、テクノロジーと環境問題を幅広く取り扱った本書は、近年のドイツの社会学者による著作としては珍しく、英語圏においても小さからぬ反響を呼び起こし（ただし英訳を通じてではあるが）、ベック自身の続編諸作のみならず、他の論者による「リスク社会」と銘打った研究文献を眼に見えて増加させる—とりわけ90年

代以降—という結果をもたらした。とはいえこれは比較的狭義の社会学に限った話で、別稿でも触れたように、そもそもリスクという概念を主題とした研究自体は、社会学以外の領域でかなり以前からおこなわれており、社会科学やその隣接領域では経済学や心理学、文化人類学といった領域を中心にそれぞれ独自の概念構築がなされてきた。したがって遅まきながらこの問題に取り組みはじめた社会学としては、それら先行諸領域の成果を参照し、共通項や相違点を確認しながら、一方において社会学ならではの呼べるリスク研究を可能にする概念を彫琢せねばならないという、厄介な課題を最初から抱えていることになる。その試みはまだ資産となるべき成果を集約するに至っていないが、ベックに触発されたドイツや英米の研究者が現在徐々にそれに向けた取り組みを進めつつあり、遠からず社会学においても共有可能な概念枠組が整備されることが期待される。

ところでここに、そのリスク社会というテーマと、さらに別の〈ゼイション〉とを比較対照の俎上に載せた興味深い論考がある。それはイギリスの社会学者ブライアン・ターナーの手による「マクシティズンズ—現代政治におけるリスクとクールさとアイロニー」という奇妙なタイトルを持っている。そもそもマクシティズンMcCitizenとは何か。その問いへの答えは、この論考が収められている編著のタイトル『マクドナルド化への抵抗』から推測することができるわけだが、実はわれわれが注目したいもう一つの〈ゼイション〉とはこの「マクドナルド化」のことである。「マクドナルド化」なる言葉はアメリカの社会学者ジョージ・リッツァが1980年代前半から提唱し始めたもので、93年に出版され先頃邦訳も登場したリッツァの著作『マクドナルド化する社会』（原題はThe McDonaldization of Society）によって広く人口に膾炙するようになった。いうまでもなく「マクドナルド化」の「マクドナルド」とは、ファーストフードの代表的存在として知られ、日本でも数多くの店舗を展開するあのハンバーガーレストランチェーンのことである。「マクドナルド化」の意味するところは多岐にわたるけれども、リッツァ自身が端的に「ウェーバーを現代風に言いかえると、それはマクドナルド化である」（邦訳5ページ）と述べていることから分かるように、マックス・ウェーバーがかつてその「合理化論」を通じて明らかにしたプロセスの現代的展開を表現するために採用されたシンボリックな表現が、他ならぬ「マクドナルド化」なのである。

では、ターナーが社会の「リスク化」と「マクドナルド化」という二つの〈ゼイション〉を同時に取り上げ比較しようとするのはなぜであろうか。それは、ベックとリッツァがともに「マックス・ウェーバーの合理化論に強い影響を受けて」おり、「科学的合理性が社会的組織化に及ぼすインパクトについて関心を抱いている」という意味で「近代へのパースペクティブに関して知的源泉を共有しているにもかかわらず、まったく異なった結論に達している」[Turner, 1999 : 83] からである。近代(西洋)社会の本質的特徴を合理化・合理主義という視点から明らかにし

ようとしたウェーバーの探究を継承し、それを新たな現代社会論へと展開することを目指しているながら、一見すると食い違った社会のイメージを描き出しているベックとリッツァ双方の論点を比較し、それを通じて現代社会における市民としてのあり方(シティズンシップ)のモデルを模索することがターナーの狙いである。

小論では、ターナーの議論にヒントを求めつつも、ターナーの目的とは異なり、〈リスク(化)の社会学〉を構想する作業の一環という立場から、現代社会の動向を記述するこの新しい2つの〈ゼイション〉の関係について考えてみることにしたい。

2. リスク化かマクドナルド化か

マクドナルド化をリスク化と対照させ比較するために、ターナーはさしあたってきわめて単純簡素ながら、この問題圏に関連した学史的な流れを跡づけるところから始めている。

そもそも社会学の歴史をいわゆる「古典」の時期まで遡ってみると、近代の資本主義社会についての叙述は、その分析の次元によって大きく2つの種類が存在していたことがわかる。それは「市場のリスク」の次元と「合理的規制」の次元による相違であって、前者を代表するのはカール・マルクス、後者を代表するのがマックス・ウェーバーである。好況と恐慌が繰り返され、生産の革新とそれにともなう社会関係の動揺と階級間の闘争が不断に続く資本主義を、マルクスは「きわめて不安定で不確かな」つまりつねにリスクをはらんだ一社会システムと捉えた。一方ウェーバーは、『プロ倫』をはじめとする諸研究において、資本主義的近代を「合理化」によって、つまり禁欲的規律と科学的規制、計算可能性と官僚制化が社会生活の諸領域に浸透し、それ以前の世界にあり得たindividuality(個別性、個的特質)を喪失させるプロセスとして描き出した。かたや革命も含めた「根本的な変化と乱流のメタファ」が強調されるのに対して、かたや「鉄の檻」という印象的な表現が象徴する堅牢不朽の体制の登場を宣告する一いささか教科書的に過ぎるくらいはあるものの、確かにこの対比は、リスク化とマクドナルド化につながるテーマがすでに古典的社会学の時期から存在していることをわかりやすく示している。

視点・重点の置き方において異なるこの2つの立場は、近代資本主義社会の分析として、それぞれに大きな影響力を持ち続けてきた。社会学・社会理論は、いわばこの二大軸の間であって、どちらに重心をおくかによってそれぞれの理論タイプごとのニュアンスの違いを見せてきたと言っても過言ではあるまい。

しかしながら、時代が下り今世紀を通じて支配的なものとなった「高度」資本主義(あるいは「後期資本主義」と言い換えてもよい)が姿をあらわすにつれ、こと社会学・社会理論の領域に関しては、軸のあいだのバランスに変化が起こる。資本主義の〈自己修正〉が繰り返されるにつ

れ、経済恐慌から革命へという教条的マルクス主義のヴィジョンが力を失うなかで、マルクスから強い影響を受けているはずの理論家たちからも、ウェーバーの合理化論を強く意識した議論が提起されるようになる。例えばいわゆるフランクフルト学派、ことにTh. アドルノやM. ホルクハイマーによる道具的合理主義批判は、ウェーバーの「鉄の檻」の考え方をさらにラディカルに押し進めたものであるし、彼らの次世代に当たるJ. ハーバーマスがその理論的営為の全体を通じて追求しているテーマの1つは、ウェーバーの「鉄の檻」のイメージを〈克服〉する方途の構想であると言ってもそれほど的是はずれではあるまい。また今世紀後半の思想史上もっとも重要な人物の1人と目されるM. フーコーは、規律と刑罰、統制と秩序に関する研究のなかで、西洋近代の監獄装置の作動様式を「パノプティシズムによって組織化された合理的システム」[Turner, 1999 : 85]として描き出すと同時に、それが近代社会そのものの編成原理と密接な連関にあることを明らかにしたが、これはウェーバーの合理化論と多くの接点を有するものとなっている。もちろんこうした展開は「マルクスかウェーバーか」という択一的選択の結果として生じたことではなく、今世紀のはじめに近代(資本主義)社会の成立と発展のダイナミズムをめぐってウェーバーが残した数々の命題が、その後の歴史的〈現実〉のなかで説得力・存在感を揺るぎないものとしたことを物語っており、このことによってマルクス(あるいはフロイトといった人びと)の重要性が過小評価されることを正当化するものでは決してない。

ともあれそうした経緯から、ウェーバーと彼の系譜に連なる諸理論が20世紀の社会学のなかで強い影響力を持ち続けてきたわけであるが、ターナーはここに来て、そのトレンドに再び変化が生じていると見なしている。つまり、90年代における時代状況の変化、つまりマクロ経済環境の不安定化や市場重視・管理規制撤廃の動きを反映して、規制と秩序のイメージに対抗するかたちでリスクと混乱もしくは無秩序のイメージが浮上しつつあるというわけである。リッツァがみずからウェーバーの議論の延長線上にいと明言していることにも見られるように、多くの社会学者にとってウェーバーとフーコーを結ぶラインには依然としてきわめて重要なテーマが並んでいる。とはいえ、ベックが正当に指摘するとおり、一昔前の産業社会的な規律と秩序のイメージや理念型的に捉えられた合理化論では説明しきれない諸問題が続出していることもまた事実である。そこで必要となるのは、ウェーバー的枠組を否定することではなく、ましてやマルクスの発想に素朴に立ち返るのでもなく、秩序と混乱のイメージをともにしかるべく位置づけながら、現下のトレンドの変化を把握しうる適切な説明図式を組み上げることである。ターナーはベックとリッツァの議論を接合させることでそれが可能になると考えているようであるが、それに取りかかる前段階として、双方の主張の違いを明確にするための論点整理を試みている。以下順次それを確認しておくことにしよう。

2-1. 未分化なリスク概念の限界

まずベックのリスク社会論について見てみよう。ベックは1986年の『リスク社会』の公刊以来、陸続と発表される著書・論文のなかでリスク社会について繰り返し語っているが、その論じ方やアクセントの置き方、ニュアンスが微妙に変化しているにも関わらず、必ずしもそのことをわかりやすく明示しているわけではない。そこにベックの議論の特徴の一つを見て取ることができるわけだが、ニュアンスの変化を逐一追尾してもおそらく得るところはあまり多くないと思われるので、ここではターナーとともに、ベックの議論のなかで比較的変わらないかたちで繰り返される部分を単純化して取り出し、その問題点を指摘する。

ベックの考えでは、リスク社会は近代化Modernisierungのあり方が変容することによって出現する。一般に了解されている近代化とは、いわゆる伝統的社会の近代化を指すが、ベックはその近代化とは区別されるもうひとつの近代化が現在起こりつつあると考えている。それは「産業社会の軌道の『内側』で生じる近代化が、産業社会の『諸前提』の近代化によって置き換えられていく」[Beck, 1986 : 14] という場合の后者の近代化であり、産業社会(ないし工業化社会)を成り立たせている原理・構造・制度それ自体の近代化を意味する。ベックはこれを「再帰的近代化reflexive Modernisierung」と呼び、現代社会を産業社会からリスク社会への移行的段階にあると見なしている。ベックの議論のルーツがウェーバーにあるとターナーが考えるのは、このようにベックが近代化あるいは近代[性](Moderne, modernity)に対する批判的な検討を議論の中核的要素としているからである。しかしベック自身は、近代社会の枠組を前提とし、その枠組内にある構造や機能の諸原則を不変的なものと見なす社会学の伝統的思考法を変えなければならないと主張しており、そうした古い枠組のなかにあるという機能主義やマルクス主義とともに、ウェーバーをも批判的に克服すべき対象と見なしている。「『リスク』というカテゴリーは、マックス・ウェーバーにはまだ決してはっきりとはわかっていなかったような社会的思考と行為のタイプの代表」[Beck, 1993 : 47] なのだから。

再帰的近代化は、そのreflexivという形容詞のために、近代化の〈洗練〉や〈向上〉といったながしかポジティブな意味合いで捉えられそうになるが、それは完全な誤解である。近代の再帰化、つまり「近代化の近代化」は、近代化の結果として生じるさまざまな自体が近代化を駆動してきた基盤そのものへとはね返り、それを掘り崩すような作用を表わしている。しかも「近代の産業的段階からリスク的段階への移行は、望まれ『ざる』仕方、見え『ざる』仕方、強制的に、自立化した近代化のダイナミズムに沿って、『潜在的副作用』のモデルどおりに進んでいく」[Beck, 1993 : 36]。つまり近代化の再帰化は、いったんそれが始動すると予測しがたく、コントロールしがたいかたちでさまざまな影響を連鎖的に惹き起しながら加速するプロセスなのである。

近代化の再帰化によって推進されるリスク社会への移行のなかで、社会には従来になかった「分配」メカニズムが組み込まれる。産業社会における分配とそれにともなう対立が「富」もしくは「財goods」をめぐるなされるものであったのに対し、リスク社会では「リスク」もしくは「悪しきものbads」の分配と対立がさらに付け加わる。財の生産という産業社会の根幹といえる活動が産み出すリスクに特徴的なのは、〈偏在〉する富とは異なり、〈遍在〉的で「デモクラティック」なもの一階級や民族などという旧来の区分の壁はリスクの前には何の意味もなさない一でありながら不可視的な場合がきわめて多いということである。『リスク社会』時点でのベックにとって、その典型はチェルノブイリであったわけだが、同様のロジックで扱うべきリスクは今や原子力の問題にとどまらず、遺伝子技術に代表される生命工学や、化学物質の自然界への放出による生態系破壊などのさまざまな問題に及ぶ。

そしてさらに重要なのは、それらのテクノロジーによるリスクの分配問題と連動するかたちで、人びとの行動や社会の組織化のあり方が不可避的に大きな変化を被るという点である。かつて産業社会が体现していた合理性や計算可能性に基づく秩序、組織の強固さや組織に属する人々の連帯、明確な意思決定とコントロールといったような諸要素は、不確実性と計算不可能性が支配的となった脆弱な秩序、さらに言えば無秩序によってその力を奪われてゆく。皮肉なことに、そうした状況のなかでは確信と信頼に基盤を置く連帯やコミュニティではなく、確信のなさや不安を抛り所とする結びつきが社会関係において無視することのできない位置を占めるようになる。産業社会文明において有力であり、旧西側世界の経済と民主制を支えてきた、集合的な拘束力をもたらす「『意味の源泉』一階級意識や進歩信仰—は枯渇し、解体しつつある」[Beck, 1993: 38]。いまや人びとは、産業社会においてまがりなりにも〈安定〉した社会生活の可能性を保証していた集团的基盤から解き放たれ、漂流を始める。意思決定が個人のレベルに委ねられる「個人化(個別化)Individualisierung」が進むことで、グローバルなリスクとは異なる「個人化されたリスク」とどう向き合うかが人びとの課題となる。社会国家(福祉国家)的条件のもとでの労働市場の流動化や家族集団の溶解現象など、不確実性を随伴させながら進む「社会形式としての個人化」の事例には事欠かない。

こうして社会・制度・組織・個人のあらゆるレベルで不確実性とリスクが増大するなか、ベックが強調するのは、個人化がもたらす新たな「政治」の様相である。それは、従来の産業社会において確立したものとされてきた制度的な政治(三権分立に基づく政治・行政機関や政治的行為単位)が個々人をもはやしかるべき位置に繋ぎ止められなくなったことの結果として生じるものである。「私生活やビジネス、科学、都市共同体、日常生活など」、「産業資本主義段階では政治的なものが保護してきた意思決定の領域」が、政治的対立の嵐に巻き込まれるようになる。これまでの政治システムの〈外側〉で、細分化された 이슈ごとに展開されるこうした政治をベッ

クは「サブ・ポリティクス」と呼び、それが社会の隅々にまで紛争と軋轢を拡散させる一方で、混乱や対立の解決をめざして制度やシステムを超えようとする人びとのネットワーク的結合を産み出す可能性を指摘している。しかしリスク社会と従来型の産業社会とが並存する現状にあっては、政治システムとそれらのサブ・ポリティクスとのずれや競合など、まさに不確定な要素を多分に含んでいるがゆえに、ベックも〈希望的観測〉に類したことは多くを語ることができずにいる。

このような基本的骨格を持つベックのリスク社会論であるが、これに対してターナーは、既存の代表的なベック批判と同様に、ベックのリスク概念が体系性を欠き未分化で曖昧であることが議論を混乱させている点を問題にする。

ベックはある時には、典型的と見なされる事例に言及することによってリスクを規定しようとする。チェルノブイリ原発や化学工場の爆発事故、あるいは生殖医療や薬害などを問題にする場合がそうである。かと思えば、環境の「脅威」や「危険」、あるいは社会変動の予測不可能な帰結など、リスクと対照させられているのか、単なる表現上の相対的な違いなのかが明示されないまま複数の言葉が使われていることも多く、結果としてリスク概念がその場その場で伸縮する掴み所のないものになってしまっている。

またベックが伝統社会／近代産業社会／リスク社会という区別を持ち出し、それによって「一つの歴史モデルを提出しようとしている」[Turner, 1999 : 87] ことに対しても、ターナーは疑念を呈する。この発展段階論とも受け取れるような図式を掲げることで、「暗黙のうちにリスクの定義が提示され」[Turner, 1999 : 88] てしまっており、ベックに体系的なリスク概念がないことを多少とも大目に見ようとする人を再び混乱に陥れるというわけである。もう少し具体的に言えば、例えば歴史学の成果を参照すればわかる通り、近代化以前の世界においても、個人を超えて社会規模で多大な影響を及ぼし、「デモクラティック」でありかつ不可視的であった伝染病のように、ベックがリスク社会のリスクに固有の特徴と見なしたがっている特徴をもつ現象がある。人口に壊滅的な打撃を与える疫病は、貿易の結果として爆発的に伝播するという意味で単なる自然現象ではないし、大量の死者は人びとの死生観や宗教的イデオロギーに変化を迫り、〈個人〉の〈内面〉に対する「反省」という心理的メカニズムを産み出しさえした[ibid.]。こうした話題は歴史学や人類学における成果としてはすでに旧聞に属するものであり、それを考慮せずに段階図式にまとめようとするのは不用意だということになる。

そうした問題を少しでも避けるために、ターナーはリスクの概念を取りあえず「タイプ1」と「タイプ2」に区別することを提案する。「タイプ1」は(狭義の)テクノロジーが生態系環境に対してもたらす損害や脅威を指し、「タイプ2」は「社会文化的リスク」、すなわち昨今日本でもさかんに用いられるようになったさまざまな経済活動にともなうリスクや、文化人類学が呪術や

信仰との関連で扱っているようなリスクである。そしてこの区別を用いれば、ベックが「個人化（個別化）」という概念のもとで論じている問題のほとんどはタイプ2のリスクとして扱えばよいことになる。

ただしターナーによる2つのタイプのリスクというこの区別はそれ自体体系的というわけではなく、あくまで便宜的なものにとどまるので、ベックの議論の難点を根本的に改善するものではない。しかも社会学的に見て興味深い問題を多く含むはずの「タイプ2」のリスク、つまり個人化論も、すでに英語圏ではP. L. バーガーとT. ルックマン(『現実の社会的構成』)によって60年代に「近代社会における生活世界の多様化」[Turner, 1999 : 90]というテーマで論じられた内容を復唱するのに近く、さらに言えば個人化という捉え方そのものもの、それが人びとのライフスタイルやライフコースの断片化・分節化、あるいはライフチャンスの平準化などの意味合いを含む限りで、例えば現代の代表的社会学者の一人であるP. ブルデューが主張する社会的不平等の再生産構造の確固たる存在というテーゼと相容れないなど、ベックの議論の説得力を疑わせるような状況が少なからずあるのだ。

『リスク社会』が巻き起こしたセンセーションは、いわゆるタイミングの良さによるだけではなく、テクノロジーと科学の肥大・暴走、政治の衰退と経済のギャンブル化、社会関係の脱組織化とネットワーク化など、現代の先進産業社会に噴出する諸現象をリスクという一つのラベルによって際立たせ、それらを横断的に描き出そうという目論見が一定程度は功を奏したことの現われだろう。しかしあえて概念を精緻化せず、縦横無尽に論を展開させようとしたことが却ってその概念の有効性を狭め、論点をぼかす結果になったこともまた否定できないのである。

2-2. マクドナルド化とリスク社会

次にターナーはベックのリスク社会論のなかでもとりわけ「タイプ2」のリスク、すなわち社会的リスクの増大についての議論を「現代社会の脱規制化—それは国際金融市場の自由化と経済合理主義の観点からのアカウントビリティの強調、そして社会の消費化の増大から生じた—に対する社会学的な応答」[Turner, 1999 : 91]と小括したうえで、これを現代社会で進行しているもう一つのプロセスである「標準化と合理化」、すなわちマクドナルド化と対比させる。

リスク社会論が混乱を来しているのとは対照的に、マクドナルド化はリッツァによってきわめて単純明快に論じられている。その論証は理論的な色彩がそれほど濃くなく、マクドナルド化の基本的枠組を提示するためにウェーバーの合理化論をはじめとするいくつかの先駆的アイデアが紹介される以外は、さながらマクドナルド化現象に関する一覧カタログのような体裁になっている。

マクドナルド化の発想の原点は、ウェーバーの遺稿集である『経済と社会』に収録された官僚制に関する論考にあり、ウェーバーが西洋近代の官僚制化の特質であると指摘した「形式合理性」こそが、合理化・規格化・マクドナルド化を駆動するプログラムにも埋め込まれている基本原則である。それは(1)効率性、(2)計算可能性、(3)予測可能性、(4)人間によらない技術による制御と管理、という4つの次元を中心に構成されており、理念的に理解されるべき「社会の普遍的な官僚制化」において、それぞれの次元が相互に関連しながら強化徹底されていくことが想定されていたのと同じように、社会の普遍的なマクドナルド化もこの4つの次元が相互充進的となることで社会の各領域において明瞭な姿を取るようになる。

リッツァの示すカタログには、〈御本家〉マクドナルドに代表される各種のファーストフードに始まり、ショッピングモール、娯楽、旅行、メディア、コンピュータ、スポーツ、医療とダイエット、都市計画、政治、教育、職業、家庭生活、果ては葬儀やセックス産業に至るありとあらゆる分野ですでに実現しているか、実現の途上にある事例がずらりと並べられている。マークシート試験とフロッピーディスクに収められた教科書、行き届いた教材と講義ノートの販売サービスの完備された「マク大学」。予約なし、待ち時間なしで次々と診察と治療をさばっていく「マクドクター」。どんな記事も1ページ以内に収める「マク新聞」。なるべく現地の文化に触れない「マクツアー」。現代アメリカの大衆消費社会が誇る、めくるめくような商品とサービスの数々は、日本社会にも見事なまでに移植されており(もちろん日本が発信源となった商品やサービスも少なくない)、〈洋の東西を問わず〉といった決まり文句を完全に無意味にするほどにマクドナルド化は普遍化し日常化していることがわかる。

「表現型」こそ違え、これらさまざまな領域を席卷しているマクドナルド化に共通に見られる効果・影響を、ベックの議論との関連を意識しながらターナーは「驚きのない社会、タイプ2の

リスクのない社会、あるいは少なくともそうしたリスクの抑制された社会の創出」〔Turner, 1999 : 91〕であると述べる。「安くて信頼でき、規格化され、世界中どこにでもあるglobal」マクドナルドのシステムが、「良く知っていて予測可能な、リスクのない食事経験」を保証するように、マクドナルド化された社会の各領域は、それぞれに固有の行動や経験のパターンからリスクを除去していき、全体として「驚き＝リスクなき社会」がもたらされるというわけである。

われわれはようやくここでターナー独自の問題設定にたどり着く。正反対の社会のイメージを導くかに見えるリスク化とマクドナルド化はいったいいかなる関係に立つのか。両者の関係を考えるポイントとして少なくとも、(1)時間的に前後する関係なのか、同時的なのか、(2)影響作用の点で競合的・相殺的なのか、相互補完的なのか、無関連なのか、という2つの軸を考えることが可能であろう。

例えばマクドナルド化はリスク化に先立つものであり、リスク社会化〈以前〉の産業社会において典型的な現象だという見方がある。リッツァみずからも言及しているとおり、マクドナルド化は、マルクス主義経済学が今世紀の資本主義を特徴づけるものとしてしばしば引き合いに出すテイラーイズムとフォーディズムのヴァリエーションと見なすことができる。自動車製造ラインのベルトコンベアが象徴する徹底した製造工程の分業と品質管理、効率的な作業環境の整備と管理の技術は、先に示したマクドナルド化を構成する4つの次元すべてに適合する生産と労働のシステムであり、その意味ではマクドナルド化はフォーディズムの別名であるという見方も成り立つ。ところがフォーディズムそのものはすでに「ポスト・フォーディズム」によって、つまりフォーディズム的な大量生産と半熟連労働形態というスタイルではなく、少量多品種で生産性と収益性の高い生産と、細分化され差異化された高度な労働形態によって置き換えられつつある、という認識が一般化している。もしこの図式が正しければマクドナルド化は早晩衰退し、むしろ生産と労働に関してリスク社会的なイメージが優越することが予想される。

これに対して、マクドナルド化とリスク化は同時的であるが、その〈レベル〉が異なっているという解釈も成り立つ。例えばマクロレベルにおいては不確実性＝リスクと脱規制が進展しながら、ミクロなレベルでは規律と管理にもとづくマクドナルド化が進むという場合がそうである。リッツァはこれに近似した立場から、アメリカを中心とした金融機関が目下の経済環境のなかで示す行動形態として、グローバル化する市場に対するリスク志向的な行為と、一般の顧客に対する高度に合理化され組織化された予測可能な行為との〈使い分け〉を分析している。

またこれとは別に、マクドナルド化の概念を構成する予測可能性や確実性といった次元そのものがそもそも「間違っている」という観点から、マクドナルド化とリスク化は排他的なものではないとする見方もありうる。つまり、マクドナルドの食事は、それを食べても食中毒にはならないであろうという意味での安全性(確実さ)は期待できても、個々の食品の栄養学的な価値やマク

ドナルドに慣れ親しむことでできあがる「ライフスタイル」という点から見れば、それ自体健康を脅かすリスクであると言うこともできるからである。他の領域のマクドナルド化においても類似の考察は可能であり、その場合はマクドナルド化はリスク化を促進する面を持つということになる[Turner, 1999 : 92-94]。

最後にターナー自身のスタンスはどうであるかを上記に合わせて示すならば、(1)リスク化とマクドナルド化は同時進行するプロセスであって、かつ(2)それらは別のレベルで作用し、相互に無関係ではない、ということになるだろう。ターナーはベックのリスク概念の曖昧さを修正を試みる際に、テクノロジーや生態系のリスク(タイプ1)と社会的・文化的リスク(タイプ2)とを区分し、ベックのリスク概念が〈本来〉想定しているのは前者であって、後者についてはベックが前者の発想をいわば〈転用〉して追加的に論じているに過ぎないのだと解釈することによって、社会文化的リスクをベックの議論の文脈からひとまず切り離す。そして社会文化的リスクが増大しつつあるとベックが論じている(その際ベックは「リスク」よりもむしろ「個人化」という表現を重視する)領域に関しては、ウェーバーからアドルノを經由してリッツァへと至る発想を継承して、同時にマクドナルド化の駆動力もまた大きな影響力を保持していると考えるのである。

ターナーが社会文化的領域に関してベックの考え方を受け入れることを留保し、マクドナルド化の展開に注目するのはなぜなのだろうか。それはリスク概念の理論的な不備によるというよりも、ターナーがマクドナルド化のもたらす社会文化的な効果に決して小さくない〈意義〉を認めようとするからである。ターナー論文の副題にある「クールなシティズンシップとアイロニカルなコミットメント」はこのことと結びついている。

マクドナルド化によって人びとにすっかりなじみ深いものとなったマクドナルド・レストランでの「食事のスタイルを、グローバルな多文化環境における政治的コミットメントのメタファと見なす」ことをターナーは試みる。まず人類学的な身体論を参照しつつ、ターナーは、マクドナルド的な食事のスタイルが、伝統的社会において食事の果たしていた儀礼的な意味を喪失し、「共食」が宗教的・社会的秩序の基盤となり得たような意味世界から決定的に遠ざかったことを強調する。マクドナルドでの食事は共同体への「所属の絆を形成することを目的としない、私化された個人主義的な消費パターンを表わしている」[Turner, 1999 : 96]。ここで登場するのがメディアに関するマクルーハンの用語法から借用された、「厚い連帯」と「薄い連帯」、「熱いコミットメント」と「冷たいコミットメント」という2組の対語である。伝統的宗教的な祝祭の食事には、激しさと持続性と複雑さがつきものであり、それによって共同体における「厚い連帯」と「熱いコミットメント」が絶えず確認され、強化される。ところが、短時間にあっさり単純な食事を済ませることを身上とするマクドナルド的食事スタイルは、「薄い連帯」と「クールな(冷めた)コミットメント」による「薄い共同体」しか作らない。

これは一見すると、食べることという人間生活にとって基本的な意味を持つ行為を徹底的に無機質化し、同時に社会的共同性の基盤を破壊したマクドナルド化への非難の言葉とも受け取れる。しかしターナーはそうは考えない。むしろ逆に、マクドナルド化によって薄く緩やかに形成されていく「政治的アソシエーション」に、ターナーはアイロニカルな仕方ではあるが、高い意義を見いだそうとする。それはこういうことである。いまや世界規模での経済活動の進展と文化のグローバル化が進み、19世紀的な国民国家や20世紀の福祉国家の枠組では対処しきれないような多元的な文化と政治的ロイヤリティが産み出されつつある。このこと自体はいわゆるポストモダニズム的な文脈において広く共有された認識であり、ベックのリスク社会論が語っている社会像とも重なり合うところである。しかしそうした状況に対する実践的な処方箋に話題が移ると、例えばベックのように数多くの拡散的「サブ政治」が入り乱れるポストモダンの状況を(必ずしも積極的にではないが)肯定的に捉え、リスク社会を批判的に克服してゆくための政治的動員のあり方を模索する立場があるかと思えば、それとは対照的に、〈伝統的〉な近代の枠組を再生させることによって、あるいはさらに伝統社会そのものへの回帰を図ることによって混乱状況を收拾しようとする考え方もあるという具合に、多様な見解が登場する。そうしたなかにおいてターナーは、ラディカルなポストモダニズムでも、古典的モダニズムでもなく、ましてや伝統主義でもない選択肢を提示しようと試みており、そのヒントを与えるのがマクドナルドだというわけである。「都市のアノミーや経済的疎外や文化の合理化に対するこれまでの典型的な社会学的反応はノスタルジー—コミュニティ、真正さ、凝集力もしくは首尾一貫性を探し求める—であった。ポストモダニズムは、そうした反応に対して、同時代の世界が必然的に多様で断片的で複雑であらざるをえないことを示して異を唱えている。ノスタルジアへのオルタナティブとして、パロディを持ち出している」[Turner, 1999 : 98]。ノスタルジーでもなく、パロディでもない反応、それがターナーにとっては「アイロニーとクールさ」なのである。

3. おわりに

前節ではターナーの整理に依拠しながら、ベックとリッツァ双方の議論の要点を比較してきたが、最後にここであらためて「リスク社会」という問題設定に立ち返りつつ、若干の考察を加えておきたい。

(1)ベックのリスク社会論は、社会のリスク化を物語る諸現象を縦横に記述し、地球環境から個人の日常生活にいたるすべてのレベルと領域において不確実性が增大する社会を描いており、ジャーナリスティックな見地からは威力のある議論であると評することが可能かもしれない。しかしす

でに見たとおり、ターナーをはじめとする多くの論者はそうした〈大風呂敷〉の表現が惹き起す議論の混乱を批判している。ベックに向かってそもそもリスクとは何なのかと尋ねれば、「すべてだ」と答えかねないではないか、というわけである。その点で、ベックの扱うリスクをとりあえず2つのタイプに分けて考えようというターナーの提案は一応評価できる。ところがこれもすでに指摘したとおり、2つの区別にはそれほど明瞭な基準があるわけではなく、あくまで便宜的なものに過ぎないという問題を残している。ベックとターナーどちらにも言えることだが、彼らはともにリスクは何から区別されるものであるのか、それは誰にとってのリスクであるのかといったことを議論のなかに十分に組み込んでいないのである。ある事象がリスク「である」と決めるのはベックなのか、それともターナーなのか、他の誰かなのか。ベックならばその問いに「誰でもない、リスクはリスクだ」と答えるのかもしれない。しかし例えばルーマンがリスクを概念化する際に注意深く棄却しているのが、まさにこのような言い回しなのだ。ルーマンにとってはリスク概念の「事象的次元」はいわば任意であって、何がリスクであるかないかの分類や類別は極端に言えばリスク概念にとって本質的な問題ではない。リスクは「危険」と区別されるものであり、危険との差異においてコミュニケーションを通じて他者ではなく自らの行為やコミュニケーションに損害が帰責されることでリスクについてのコミュニケーションとして成立するのである[Luhmann, 1991]。

(2)ターナーはリスク社会論とマクドナルド化論を比較し、リスク化とマクドナルド化が同時進行し、並存関係にあると論じたが、ベックの立場からすればマクドナルド化はリスク化と並存的なものではなく、むしろリスク化を押し進めるプロセスの1つであるということになるだろう。つまり効率性、予測可能性、計算可能性、人間によらない制御という4つの次元のいずれもがリスクの増大をまねく要因となるというわけだ。しかしリスクのマクドナルド化について考えることはできないだろうか。パッケージ化され、ほどよく管理されたリスク？ 例えば金融市場を舞台とした〈マネーゲーム〉でプレイヤーたちが冒すリスクはまさしくこれではなからうか。マクドナルド化のリスクとリスクのマクドナルド化は、ターナーの提示しているヒントを手がかりとして考えてみるに値するテーマである。

(3)偶然にも(たぶんベックならば〈必然的に〉)と言うであろうが)昨今の日本においてはリスク化とマクドナルド化の不幸な絡まり合いを見せつけられるような出来事が相次いでいる。原子力施設事故、医療ミス、コンピュータ誤作動、トンネル崩落…。安全神話の崩壊、〈想定外〉事故の続発など、それらの出来事を飾るセンセーショナルな見出しには事欠かない。実際今日の状況を物語ると思われる事象をマスメディア的な手法でつなぎ合わせていけば、現代社会がリスクに

埋め尽くされた社会であるかの如き印象を作り上げるのはいともたやすいことである。ところがまさにそれは「マクニュース」によって仕立て上げられた〈現実〉として流通しているイメージに他ならない。ここに典型的に見られるように、われわれはマクドナルド化の行き届いた社会のなかで、潜在的には常にリスクや危険と関わり合っているが、そのことをマクドナルド化された情報環境を通じて断片的に一しかしセンセーショナルなイメージとして一知る場合がほとんどである。ターナーは、現代社会に必要なのは「アイロニカルな語彙を持つクールなコスモポリタン」[Turner, 1999 : 99]であると言うのだが、そのアイロニーを産み出す力はいったいどこから調達されるのであろうか。

【引用・参考文献】

- Beck, U. (1986), *Risikogesellschaft*, Frankfurt/M. = 東・伊藤訳、『危険社会—新しい近代への道』*、法政大学出版局、1998年。
- Beck, U. (1993), *Die Erfindung des Politischen*, Frankfurt/M.
- Beck, U., A. Giddens and S. Lash (1994), *Reflexive Modernization*, London.**=松尾他訳、『再帰的近代化』、而立書房、1997年。
- Luhmann, N. (1991), *Soziologie des Risikos*, Berlin.
- Ritzer, G. (1996), *The McDonaldization of Society*, rev.ed., Thousand Oak, CA. = 正岡監訳、『マクドナルド化する社会』、早稲田大学出版部、1999年。
- Turner, B. (1999), *McCitizens : Risk, Coolness and Irony in Contemporary Politics*, in Smart, B. (ed.), *Resisting McDonaldization*, London, pp.83–100.
- 上村隆広 (1997/99)、「リスク社会」の現在(上)(下)、『人間関係論集』14号、16号。

* ただし本稿の引用では訳文は利用していない。

**これにはドイツ語版も存在する[Beck, et al., (1996), *Reflexive Modernisierung*, Frankfurt/M.]が、ベックの論文は英語版とは異なっている。英語版のベック論文のもとになっているのは、Beck (1993)に収められた論文である。